

『水鏡』における複合動詞の諸相

— 文体分析のための基礎的調査として —

青 木 毅

一 はじめに

「水鏡」は周知のように、漢文体の歴史書『扶桑略記』に基づいて、それを漢字交じりの平仮名文に書き改めることによって成立した歴史物語である¹⁾。そのため、内容面での独自性には乏しく、文学作品・歴史資料としての価値は必ずしも高いとは言いがたい。このような「水鏡」に対する評価の低さゆえに、国語史料としても従来取り上げられることが少なかった。しかしながら、現存最古の古写本である（鎌倉時代中期を下らない書写とされる）専修寺本²⁾は、本文に大きな脱落部分がなく、転写時の誤りなども比較的少ない優良な本文であるとされている³⁾。すなわち、平仮名文献の中では比較的良好な本文が伝存しているのであり、国語史料としての価値は決して低くはないと言える。さらに、漢文体の「扶桑略記」を和訳することによって叙述されているという成立事情からすれば（このよ

うな文章を〈漢文翻訳文〉と仮称する）、いわゆる和漢混淆文の成立の問題とも関わりと考えられ、文章史上注目すべき作品であることは疑いなしと思われる。

〈漢文翻訳文〉と言えば、『今昔物語集』の天竺・震旦部（巻一—一〇）と本朝仏法部（巻一—二〇）の大部分の説話の文章もこれに相当する。稿者はこれまで、『今昔物語集』と「水鏡」を比較しながら〈漢文翻訳文〉ならではの表現を探索し、その文体的性格を検討してきた。その結果として、「オソレヲナス」のような「動詞連用形転成名詞」ヲナス」という句表現、副詞「イマダ」⁴⁾、「オヂオソル」⁵⁾「ナキカナシム」といった複合動詞が、〈漢文翻訳文〉に特徴的に用いられていることを指摘した。これらの検討結果をふまえて、本稿では複合動詞に注目し、「水鏡」の文章の性格を追究してみたい。

二 「水鏡」における複合動詞の使用状況 (1)

まず、「水鏡」が平安時代の仮名文学作品の複合動詞をどのように受け継いでいるのか(あるいはいないのか)を把握するために、「水鏡」に用いられている複合動詞について「平安時代複合動詞索引」⁸⁾との比較を行うこととする。具体的には、「水鏡」の複合動詞が同索引に掲載されているのか否か、掲載されているとすればどのような作品に用いられているのかを調べ、「水鏡」の独自性ならびに平安時代仮名文学作品との近似性を伺う手がかりを得たいと思う。

「水鏡」には異なり語で三三二語もの複合動詞が用いられているが、最も「水鏡」の独自性を示していると考えられるのは、そのうち「平安時代複合動詞索引」に掲載されていないものである。次の八〇語がそれである(丸括弧内の数字は「水鏡」における用例数を示す)。

あがめおこなふ(1)・あざむきおもふ(1)・あつかひやしなふ(1)・あひたのむ(下二)(*) (1)・あらそひいだく(1)・あらはれはじめ(1)・いそこなふ(1)・いだきたすく(1)・いだしすつ(1)・いつはりいふ(1)・いつはりかざる(1)・いできととのほる(1)・いできはじまる(1)・いできはじむ(*) (1)・いのりしづむ(1)・いのりちかふ(1)・うけたまはりきく(1)・うちうしろむく(1)・うつしかく(1)・うつしやる(1)・うば

ひととむ(1)・えらびいだす(1)・おこしそむ(1)・おこりいづ(1)・おそりおづ(1)・おそれかしまる(1)・おちおそる(四段)(*) (3)・おどろきおそる(四段)(*) (2)・おどろきおのく(1)・おほしおそる(下二)(1)・おほしかよはす(*) (1)・おほせいだす(*) (1)・かうがへみる(1)・かすめかくす(1)・かへりまかる(1)・くはへたまはす(1)・くひしげる(1)・けづりととのふ(1)・こぼちわたす(1)・ささわる(1)・さしはつ(1)・しづまりまかる(1)・しみならふ(1)・せめのたまはす(*) (1)・せめよる(*) (1)・そしりあざむく(1)・たちあふ(1)・たちうしなふ(1)・たづねめす(1)・たのしみおごる(1)・つきはじむ(1)・つげいふ(1)・つげきかす(1)・ながれしぬ(1)・なきうれふ(1)・のたまはせおく(*) (1)・のたまひあふ(1)・はせまある(1)・はたしとぐ(1)・はぢうらむ(1)・はなしおふ(1)・はなちおとす(1)・はなちおふ(1)・ひえとほる(1)・ひかりとほる(1)・ひきくつろぐ(*) (1)・ひろまりはじめ(1)・ふきうしなふ(1)・ふきはる(1)・ほろびうす(1)・まうしさづく(1)・まうでそむ(1)・まさかくす(1)・まわりならふ(*) (1)・みはからふ(*) (1)・めでほむ(1)・やききる(1)・やけそこなふ(1)・やぶりうしなふ(1)・よろこびおそる(1)

*四段活用の「あひたのむ」は、「落窪物語」「源氏物語」「法華

百座聞書抄」「今昔物語集」に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「いできははじめ」（連用形転成名詞）は、『源氏物語』に用例あり。

*下二段活用の「おちおそる」は、『大和物語』『今昔物語集』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*下二段活用の「おどろきおそる」は、『三宝絵』『今昔物語集』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「おほしかよふ」は、『落窪物語』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「おほせいづ」は、『今昔物語集』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「せめのたまふ」は、『宇津保物語』『狭衣物語』『栄花物語』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「せめよす」は、『今昔物語集』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「のたまひおく」は、『宇津保物語』『源氏物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『今昔物語集』『とりかへばや物語』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「ひきくつろがす」は、『宇津保物語』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「まわりならはず」は、『宇津保物語』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

*「みはかる」は、『落窪物語』『堤中納言物語』に用例あり（『平安時代複合動詞索引』による）。

これらを一覽して気づかれることは、「おちおそる（四段）」「（三例）」「おどろきおそる（四段）」「（二例）」を除き、「水鏡」においては一例しか用いられていないということである。『平安時代複合動詞索引』に掲載されていないことと合わせ考えると、これらは、①平安時代の仮名文学作品にはほとんど用いられないはずらしい複合動詞か、②平安時代には存在していなかった複合動詞を「水鏡」の撰者が造語したものが、いずれかであると考えられる（ただし*印を付した語については、当該語と関係すると思われる語が他の作品にも用いられており、それとの関連で捉えるべきものと考えられる）。これはくわしい文献調査を行わなければ結論の出ない問題であるが、さしあたり、『日本国語大辞典（第二版）』（小学館）によって「水鏡」以前に用例が認められるかどうかを調べてみると、項目（見出し語）のある語については次のような結果を得た（括弧内は『日本国語大辞典（第二版）』において初出とされる用例の存する文献）。

(a) 初出例が「水鏡」以前の文献となっている語
かへりまかる（『万葉集』）・せめよる（『万葉集』）・たちあふ（『万葉集』）・ほろびうす（西大寺本『最勝王経』平安初期点・

まきかくす (『万葉集』)

(b) 初出例が「水鏡」(またはほぼ同時期の文献)となっている語
いつはりかざる (『水鏡』)・おちおそる (四段) (立本寺本『法

華経』寛治元年点)・おほせいだす (『千載和歌集』詞書)・く

ひしはる (『色葉字類抄』)・さきわる (『南海奇婦内法伝』平安

後期点)・はたしとぐ (『慈恩伝』承徳三年点)・ひえとほる

(『水鏡』)

(c) 初出例が「水鏡」以後の文献となっている語

えらびいだす (『太平記』)・こほちわたす (『方丈記』)・はせ

まゐる (『平家物語』)・みはからふ (『十訓抄』)・やききる (石

川淳『普賢』)

右の分類のうち、(a)の語については、「水鏡」以前の用例の存在が確認されることから、②(『水鏡』)における造語でない可能性が高いと言えよう(ただし、「水鏡」の撰者が先行例の存在を知らずに造語した可能性もないとは言えない)。(b)の語については、用例の見られる文献の先後関係が明確でないため、②であるかどうかは未詳と言わざるを得ないが、訓点資料や古辞書に用例の見られる語については、それ以前から存在していた可能性が高いと思われる。(c)の語については、現段階では「水鏡」が初出例ということになるが、②であるかどうかは速断できない。

ところで、②(『水鏡』)における造語であるかどうかを推定する

に当たっては、依拠資料の「扶桑略記」との関係抜きに考え
ることとはできない。と言うのは、もし「水鏡」における造語である
とすれば、「扶桑略記」の表現が何らかの形で影響を与えている(投
影されている)可能性が高いと考えられるからである。そこで、前
掲の八〇語のうち(*印を付した語は除く)、現存する「扶桑略記」と
の比較が可能な複合動詞について、当該箇所を対照して示してみる。

・あがめおこなふ(1)

あかめをこなひしかとも(第三〇代・宣化天皇)―歸依礼拝

・あらそひいだく(1)

あらそひいたきたてまつりはへりき(第三二代・敏達天皇)―

争抱

・あらはれはじむ(1)

あらはれはしめおはしましき(第三一代・欽明天皇)―顯_二於

筑紫一矣

・いだきたすく(1)

いたきたすけて(第二〇代・允恭天皇)―扶起

・いつはりかざる(1)

いつはりかさり(第三四代・崇峻天皇)―似_二矯_一勝_一

・いのりちかふ(1)

〔略記〕に対応する文脈なし

・うちうしろむく(1)

うちうしろむき給て(第二〇代・允恭天皇)―北面

・うつつしかく(一)

…をうつつしか、せて(第三八代・孝徳天皇)―令レ圖…浄土相

・えらびいだす(一)

これをえらひいたして(第三五代・推古天皇)―指レ此馬

・おほしおそる(下二)(一)

…をおほしおそれしほとに(第三七代・皇極天皇)―恐レ事
不レ濟矣

・かすめかくす(一)

このたからものをかすめかくしつ(第二一代・安康天皇)―以三

爲盜爲三已寶

・けづりととのふ(一)

けつりと、のへて(第四三代・文武天皇)―削調

・さきわる(一)

はらめる人のはらをさきわりて(第二七代・武烈天皇)―裂二

孕婦腹

・たちあふ(一)

われたちあふへからすと(第一五代・神功皇后)―豈可二舉レ軍

以距レ之乎

・たちうしなふ(一)

…の人をたちうしなふへき(第三四代・崇峻天皇)―將レ斷二

朕所レ嫌人

・つきはじむ(一)

…の座をつきはしめたまふ(第四六代・聖武天皇)―奉レ創二
東大寺大佛

・つけきかす(一)

もりやにつけきかせしかは(第三三代・用明天皇)―密語二大

連二曰レ聞レ之

・ながれしぬ(一)

なかれしぬる人おほかりき(第四六代・聖武天皇)―橋流人

死。粗有二其數

・のたまひあふ(一)

かくのたまひあひたることなれば(第二〇代・允恭天皇)―隨二

群卿之請

・はたしとぐ(一)

はたしとげ給はずして(第四一代・天武天皇)―未レ遂

・はなちおとす(一)

かうきはをはなちおととして(第三三代・敏達天皇)―鬼髮剥落

・ひえとほる(一)

もちたまへるてもひえとほりて(第二〇代・允恭天皇)―溢而

腕凝

・ひかりとほる(一)

ころものうへひかりとほりか、やき侍(第二〇代・允恭天皇)―
徹レ衣而糴

・ひろまりはじまる(一)

佛法はこれよりやうくひろまりはしまりしなり(第三二代・

敏達天皇)―佛法之初。自レ茲漸興矣

・ふさうしなふ(一)

はめたにもなくふさうしなひてき(第四三代・文武天皇)―骨

灰不レ知去所―

・ほろびうす(一)

ときのほとにほろひうせにき(第三七代・皇極天皇)―一旦殄

滅矣

・めでほむ(一)

〔略記〕に対応する表現なし

・やさきる(一)

みやき、るかことくになむ(第三三代・敏達天皇)―如レ焼

如レ斫

・やぶりうしなふ(一)

佛像をやぶりうしなひ(第三三代・敏達天皇)―毀レ破佛像―

・よろこびおそる(一)

よろこひおそる、事かきりなし(第四四代・元明天皇)―伏深

欣懼

これらを「扶桑略記」との対応のしかたによって分類すれば、次のようになろう(括弧内の漢字は、「扶桑略記」の対応箇所存する漢字、また a・b・c は、「日本国語大辞典(第二版)」に基づいた前掲の分類記号を示す)。

〔A〕「扶桑略記」の漢字一字に複合動詞が対応

①当該一字を直訳の上、後項動詞を添加(二字直訳+動詞添加)

あらはれはじむ(頭)・うつしかく(囚)・ささわる(裂)(b)・
たちうしなふ(断)

②前項動詞を添加の上、当該一字を直訳(動詞添加+一字直訳)

おほしおそる(恐)・つきはじむ(創)・はたしとぐ(遂)(b)・
ひかりとほる(徹)

③当該一字を意訳(一字意訳)

えらびいだす(指)(c)・たちあふ(距)・つげきかす(語)・
のたまひあふ(請)・ひえとほる(凝)(b)

〔B〕「扶桑略記」の漢字二字に複合動詞が対応

④当該二字を直訳(二字直訳)

あらそひいだく(争抱)・いつはりかざる(矯飾)(b)・けづ
りとのふ(削調)・ながれしぬ(流、死)・やさきる(焼、
斫)(c)・よろこびおそる(欣懼)

⑤前項一字を直訳の上、後項一字を意訳(前一字直訳+後一字意

訳)

ほろびうす(殄滅)(a)

⑥前項一字を意訳の上、後項一字を直訳(前一字意訳+後一字直訳)

はなちおとす(剥落)

⑦後項一字を意訳の上、前項一字を直訳(後一字意訳+前一字直訳)

いだきたすく(扶起)・ひろまりはじまる(初、興)

⑧当該二字を意訳(二字意訳)

あがめおこなふ(礼拝)・うちうしろむく(北面)・かすめかくす(為盗)

⑨当該二字を意訳の上、後項動詞を添加(二字意訳+動詞添加)

やぶりうしなふ(毀破)

〔C〕「扶桑略記」の句表現に複合動詞が対応

⑩句表現を意訳

ふきうしなふ(不知去所)

〔D〕「扶桑略記」に対応する表現・文脈なし

⑪独自に表現(推定)

いのりちかふ・めではむ

分類中の用語のうち、「直訳」とは、漢字の訓に基づいて読み下すこと(いわゆる「訓読」)、「意訳」とは、漢字の意味に相当する日本語に置き換えること(いわゆる「翻訳」)であるが、両者を厳

密に区別することは容易ではない。その意味で便宜的な分類ではあるが、複合動詞への置き換えのあり方はさまざまであり、原漢文の漢字表記からの距離は一定ではないことがわかる。これらのうち、④のように漢字の字面をそのまま直訳(訓読)したもののや、①②⑤⑥⑦のように直訳の部分を含むものについては、原漢文との関連性が強いと考えられることから、「水鏡」において生み出されたものも含まれているのではないか(ただし、先行例の指摘されているもの(a)を付した語)は、たとえ「水鏡」の撰者がそれを知らなかったとしても、「水鏡」において生み出されたと言うことはできない)。それ以外のものについては、既存の語を当てたのか独自に造語したのかは速断できないが、いずれであってもその意味は小さくないと思われる。もし既存の語を当てたのだとすれば、原漢文を和訳するに際して、めつたに用いられないめづらしい複合動詞をあえて選択したということになり、その複合動詞は、漢文の翻訳にふさわしい用語と見なすことができるかもしれない。また、独自に造語したのだとすれば、漢文の翻訳を通じて生み出された用語ということになり、(漢文翻訳文)の文体的独自性を支える用語という見方も可能となろう。いずれにせよ、これらが(漢文翻訳文)に特徴的に見られる用語であるとすれば、(漢文翻訳語)として性格づけられることになると思われる。

三 「水鏡」における複合動詞の使用状況(2)

前項では、「水鏡」に用いられている複合動詞のうち、独自語彙（またはそれに準ずるもの）の使用状況について概観した。それは、「水鏡」の独自性を示すという意味では重要な語彙ではあるが、先述のように「おちおそる(四段)」「(三例)」「おどろきおそる(四段)」「(二例)」を除き「水鏡」に一例しか用いられていないことから、「水鏡」の文章を構成する語彙としての重要性は必ずしも高いとは言えない。そこで本項では、「水鏡」においてある程度の用例数が見られる複合動詞を対象として、使用状況を見ていくこととする。ただし、あらゆる作品に用いられるようなありふれた複合動詞では、「水鏡」の文章の性格を追究する手がかりを得ることは難しいため、使用作品(以下、「水鏡」以外の使用作品を指すこととする)の限られた複合動詞に注目する必要がある。そこで、「水鏡」において二例以上用いられている複合動詞のうち、便宜上、使用作品数一〇までのものに絞り込むとすれば、次の四七語が得られる。使用作品数は漢数字で示し、そのあとに作品名を略称で記した(「平安時代複合動詞索引」における略称にしたがう)。なお、使用作品数が同一の場合は「水鏡」における用例数の多い順、それも同じ場合は便宜上五十音順とした。

・なりまかる(4) 一(今鏡)

- ・あひにる(2) 一(今昔)
- ・いたつ(2) 一(今昔)
- ・うちたひらぐ(2) 一(三宝)
- ・うゑしぬ(2) 一(今昔)
- ・さしかたむ(2) 一(落窪)
- ・とびさる(2) 一(今昔)
- ・ぬげおつ(2) 一(今昔)
- ・おちおそる(下二)(9) 二(大和・今昔)
- ・かへりきたる(3) 二(三宝・今昔)
- ・にげうす(3) 二(竹取・今昔)
- ・まうしおこなふ(3) 二(大鏡・今昔)
- ・もてきたる(3) 二(三宝・今昔)
- ・くひころす(2) 二(三宝・今昔)
- ・わたしはじむ(2) 二(源氏・今昔)
- ・あひぐす(10) 三(今昔・今鏡・梁塵口伝)
- ・いできたる(5) 三(三宝・法華・今昔)
- ・かへりつく(3) 三(源氏・大鏡・今昔)
- ・ゆきむかふ(3) 三(三宝・法華・今昔)
- ・おもひいだす(2) 三(讃岐・今昔・今鏡)
- ・すすみいづ(2) 三(源氏・狭衣・今昔)
- ・にげさる(2) 三(源氏・今昔・打聞)

・まうしきかす(2) 三(寢覚・栄花・讃岐)

・まうしつづく(2) 三(源氏・栄花・今鏡)

・いころす(6) 四(竹取・三宝・法華・今昔)

・とりつく(2) 四(栄花・讃岐・今昔・古本)

・なげきかなしむ(2) 四(浜松・今昔・とり・宝物)

・まうしこふ(2) 四(浜松・法華・今昔・とり)

・やきうしなふ(2) 四(三宝・源氏・今昔・今鏡)

・なきかなしむ(6) 五(浜松・今昔・とり・宝物・古本)

・いのりこふ(4) 五(三宝・栄花・法華・今昔・今鏡)

・もりきこゆ(2) 五(源氏・寢覚・狭衣・栄花・讃岐)

・まうしあふ(12) 六(竹取・栄花・讃岐・今昔・今鏡・梁塵

口伝

・ながしつかはす(8) 六(三宝・枕(能)・栄花・今昔・打聞・

宝物)

・うちとる(3) 六(宇津保・枕・大鏡・今昔・宝物・古本)

・うちころす(2) 六(大和・落窪・宇津保・枕・今昔・宝物)

・かへしつかはす(2) 六(宇津保・栄花・今昔・打聞・今鏡・

厳島)

・おどろきさわぐ(3) 七(蜻蛉・宇津保・源氏・寢覚・浜松・

大鏡・今昔)

・あそびありく(2) 七(伊勢・三宝・宇津保・枕(三)・浜松・

今鏡・梁塵)

・しりそむ(2) 七(源氏・寢覚・栄花・今昔・厳島・古今・

貫之)

・なげいる(2) 七(伊勢・宇津保・源氏・枕・讃岐・法華・

今昔)

・めしとる(2) 七(竹取・宇津保・源氏・寢覚・大鏡・今昔・

今鏡)

・おはしつく(3) 八(宇津保・源氏・寢覚・浜松・狭衣・栄

花・大鏡・今昔)

・めしかへす(2) 八(大和・平中・宇津保・栄花・大鏡・今

昔・打聞・今鏡)

・まゐりつく(2) 九(源氏・枕・寢覚・栄花・大鏡・讃岐・

今昔・とり・梁塵口伝)

・むかへとる(2) 一〇(宇津保・源氏・更級・寢覚・浜松・

狭衣・栄花・法華・今昔・今鏡)

・めしあつむ(2) 一〇(伊勢・落窪・宇津保・源氏・紫・寢

覚・栄花・大鏡・法華・今昔)

以下、これら四七語の複合動詞を対象として考察を進めたいと思う。

対象となる複合動詞四七語が用いられている作品を、使用されて

いる複合動詞(異なり語)の多い順に配列してみると次のようにな

る(丸括弧内の数字は、四七語中の使用語数)。

今昔物語集(40) 源氏物語(15) 栄花物語(14) 今鏡(12)
三宝絵(11) 宇津保物語(11) 大鏡(9) 夜の寝覚(9) 法
華百座聞書抄(8) 讃岐典侍日記(7) 浜松中納言物語(7)
宝物集(5) とりかへばや物語(4) 竹取物語(4) 狭衣物
語(4) 打聞集(4) 枕草子(4) 古本説話集(3) 大和物
語(3) 落窪物語(3) 梁塵秘抄口伝集(3) 伊勢物語(3)
殿島御幸道記(2) 平中物語(1) 蜻蛉日記(1) 枕草子(能
因本のみ)(1) 枕草子(三巻本のみ)(1) 更級日記(1) 紫
式部日記(1) 古今和歌集(1) 紀貫之全歌集(1) 梁塵秘
抄(1)

まず気づかれることは、「今昔物語集」における使用語数が目立
って多いことである。「水鏡」と「今昔物語集」とにおける表現形
式上の共通性については、すでに旧稿において指摘してきたところ
である(「一はじめに」参照)。右の結果についても、複合動詞とい
う限られた語彙ではあるが、「水鏡」と「今昔物語集」の語彙の共
通性の高さを示していると言えよう。

次に、複合動詞に関して「水鏡」との共通性の高い作品の傾向性
を見るために、上位十位までの作品(「浜松中納言物語」まで)に
注目してみる。「源氏物語」は語彙量が豊富なため、結果として「水
鏡」と一致する複合動詞が比較的多くなっているとも考えられ、語
彙の共通性を積極的に示しているかどうかは速断できない。「今昔

物語集」に匹敵する言語量を有していることから考えると、むしろ
共通性はさほど高くはないと見るべきかもしれない。「栄花物語」
「今鏡」「大鏡」は、「水鏡」と同じ歴史物語であることから、共通
する複合動詞が多いのは自然なことであろう。「三宝絵」「法華百座
聞書抄」は、「今昔物語集」と同様の説話集(または説話を含む作
品)であるが、これらは漢文体の出典を背景にもつ文章(漢文翻訳
文)を含んでおり、その意味で「水鏡」の文章と文体的性格の近い
作品と言えよう。複合動詞に共通するものが多いのもそのことを反
映していると推定される。「宇津保物語」は、和文の中では漢文訓
読語の使用が目立ち、文体的には純粹な和文とは言いがたい作品で
ある。「水鏡」も漢文体の依拠資料(「扶桑略記」)の影響で少な
らぬ漢文訓読語が使用されており、漢文訓読語の混在する和文とい
う意味での共通性はあると言える。ただし、使用作品五までの複合
動詞について見た場合、「宇津保物語」にはそれらの複合動詞は使
用されていないことになっており(上記の一覧によれば、「宇津保
物語」の名が見えるのは使用作品六の複合動詞からである)、他の
上位作品に比べると、「水鏡」との共通性にはやや距離があると言
うべきかもしれない。「夜の寝覚」「讃岐典侍日記」「浜松中納言物
語」は、比較的純粹な和文であるとされているが、平安時代後期の
作品であり、成立時期が「水鏡」と近接している。複合動詞の共通
性には、時代性ということが関係しているとも考えられる。

以上大まかな傾向を概観したに過ぎないが、複合動詞の使用に關して「水鏡」と共通性の高い作品は、文体的にも何らかの共通性を認めることができるように思われる。くわしい考察は今後の課題である。

また、各複合動詞についてもその使用状況をくわしく調査する必要があるが、まずは「水鏡」において特徴的な複合動詞をキーワードとして取り上げ、他の作品における使用状況とも比較しながら、「水鏡」の文章の性格を考察することが必要であろう。そのためのキーワードとしてふさわしいのは、「水鏡」において用例数が比較的多く、なおかつ使用作品の限られた語であろう(すでに述べたように、使用作品の多いありふれた語ではキーワードにならない)。試みに、先の四七語の中から用例数が五例以上のものを抜き出してみる。

- ・ おちおそる (「下二」(9) 二(大和・今昔))
- ・ あひぐす (10) 三(今昔・今鏡・梁塵口伝)
- ・ いできたる (5) 三(三宝・法華・今昔)
- ・ いころす (6) 四(竹取・三宝・法華・今昔)
- ・ なきかなしむ (6) 五(浜松・今昔・とり・宝物・古本)
- ・ まうしあふ (12) 六(竹取・栄花・讃岐・今昔・今鏡・梁塵口伝)
- ・ ながしつかはす (8) 六(三宝・枕(能)・栄花・今昔・打聞・宝物)

これらのうち「おちおそる」「なきかなしむ」については、すでに別稿で論じたところである。「いできたる」は使用作品が限られているが、これは漢文訓読語「きたる」を含んでいることに起因していると思われる。複合動詞として取り上げる必然性には乏しいと思われる(平安假名文学作品では「いでく」が一般に用いられている)。「いころす」「ながしつかはす」については、意味上、その使用が作品内容に左右される傾向があると考えられるため、純粹に文章の性格を考察するキーワードとしてはふさわしいとは言えない。その意味では、「あひぐす」「まうしあふ」は、所期の目的のためのキーワードとしての条件を満たしていると言えよう。

四 おわりに——今後の課題——

以上、「水鏡」に用いられている複合動詞について、平安時代の假名文学作品における使用状況を概観した結果、「アヒグス(相具)」などに「水鏡」ならではの特徴が表れていることが伺われた。ところで、「アヒグス(相具)」は一〇例もの用例が「水鏡」¹⁰⁾に見られるが、そのうちの八例については、依拠資料の「扶桑略記」¹¹⁾との比較が可能である(残りの二例については、当該箇所「扶桑略記」の本文が伝存していない)。その八例の、「扶桑略記」における対応箇所は、次のようになっていいる。

・ その人をあひくしてまいりて(第一八代・履中天皇)——相共參來

・ふたりあひくして(第二五代・顕宗天皇)―俱

・あひくしていへにかへりて(第三一代・欽明天皇)―將レ家

・皇子そのひとりをあひくしたまひて(第三七代・皇極天皇)―

中大兄皇子率二子磨等一

・智光あひくして(第三八代・孝徳天皇)―即引二智光一

・くにのいくさあまたしたかひたてまつりにしをあひくして(第

四一代・天武天皇)―々(國)司并數人從レ之

・さまざまの物をあひくしてまいれしに(第四四代・元明天

皇)―貢二方物一

・くにのいくさ一萬七千人をあひくして(第四六代・聖武天

皇)―(対応する文脈なし)

右によれば、『扶桑略記』の対応箇所には「アヒグス(相具)」と読める漢字表記は認められず、したがって、「水鏡」の「アヒグス(相具)」については、『扶桑略記』の影響で用いられているとは言いがたい。

次に平安時代の他の仮名文学作品に目を向けてみると、『水鏡』の他、『今昔物語集』に六五例、『今鏡』に一例、『梁塵秘抄口伝集』に七例用いられており、『今昔物語集』における用例数が突出している。言語量が群を抜くとは言え、平安時代における使用作品数の少なさを考えると、「アヒグス(相具)」は『今昔物語集』に特徴的な用語として捉えることも可能であろう。

そこで今後は、『今昔物語集』における「アヒグス(相具)」を改めて取り上げて、その文体的性格について検討することが必要であろう。

注

(1) 平田俊春『日本古典の成立の研究』(一九五九年、日本書院)第二篇第三章「水鏡の成立と扶桑略記」。

(2) 貴重図書影印本刊行会叢書「水鏡」(一九三八年、同刊行会)鈴木三七「水鏡解説」。

(3) 松村武夫「水鏡の諸本」(『歴史物語講座第五巻 水鏡』一九九七年、風間書房)。

(4) 拙稿『今昔物語集』の文体の側面―機能動詞「ナス」の分布が示唆するもの―(『訓点語と訓点資料』第九十九輯、一九九七年三月)。

(5) 拙稿「副詞「イマダ(未)」の用法から見た「水鏡」の文体的性格」(『国文学攷』第一七八号、二〇〇三年六月)、同『今昔物語集』における副詞「イマダ」の性格について(『国文学攷』第一八二号、二〇〇四年六月)。

(6) 拙稿『今昔物語集』における「オチオソル」の文体的性格について―「水鏡」との比較を通して―(『訓点語と訓点資料』第一一四輯、二〇〇五年三月)、同「平安時代における漢文翻訳語「ナキカナシム(泣悲)」について」(『小林芳規博士喜寿記念国語学論集』二〇〇六年、汲古書院)。

(7) 榊原邦彦『水鏡本文及び絵索引』(一九九〇年、笠間書院)による。

(8) 東辻保和・岡野幸夫・土居裕美子・橋村勝明編『平安時代複合動詞索引』(二〇〇三年、清文堂出版)。

(9) 注(6)文献。

(10) 本文は、注(2)文献による。

(11) 本文は、新訂増補国史大系（吉川弘文館）による。

〔付記〕

本稿は、平成十七年度広島大学国語国文学会秋季研究集会における口頭発表「複合動詞から見た『水鏡』の文体に関する一考察——『今昔物語集』における「アヒグス（相具）」との比較を中心として——」の前半部分をもとに、大幅に加筆したものである。発表の席上では岡野幸夫・原卓志・松本光隆各氏より、また発表後には榎木久薫・佐々木勇両氏より、貴重な御助言を賜った。記して感謝申し上げたい。

—あおき・たけし、徳島文理大学助教授—